

児童の伝え合う力を育てる指導

－新聞を活用した国語科の授業実践を通して－

M11EP006

三枝 幸

1 研究主題の設定理由

「伝え合う力」は「話す・聞く・書く・読む」すべての言語能力を総合的に使う力であり、これからの社会を生き抜くために必要な力として注目されている。新小学校学習指導要領国語においても「伝え合う力を高める」ことが目標に挙げられた。「伝え合う力」を育むためには、一方向になりがちだった学習活動を見直し、双方向性をもって互いの思いや考えを共有したり、新たな思いや考えを生み出したりできるような学習活動が必要になる。

一方、現代の情報化社会において、さまざまな情報の中から自分で必要な情報を得る主体的な態度を育てることが必要となる。同時に、学習を通じて得たことを、自分なりに工夫して周囲に発信する中で、「伝え合う力」を高めていくことも、大切になると考える。

新学習指導要領には、新聞の活用が盛り込まれた。言語活動を充実させるための教材として、新聞の活用が多く例示されている。新聞は本来、「伝える」機能を持っており、子どもたちの「伝え合う力」を育むのに適した教材と言えるだろう。しかしながら、学校現場では、教師の多忙化が進み、日々新しく変わるニュースを授業に取り入れたり、新聞作りを学習計画に取り入れる余裕が十分でないのが現状である。そこで、新聞をどのように学校現場に取り入れ、活用していったらよいか、児童の「伝え合う力」を育むという視点から探っていきたい。

授業における新聞活用には、大きく二つの方向が考えられる。新聞を資料として活用するなど新聞を媒介にした児童の「伝え合い」を重視した授業づくりをしていくことと、児童が新聞

づくりを通して「伝え合い」学び合う活動を教育課程の中に取り込んでいくことである。本年度は単元のねらいを達成するための教材として、新聞を活用した授業に力点を置き研究を進め、「伝え合う力」を育むための一試みとして、「新聞の活用」の在り方を考えていく。

2 研究の目的

伝え合いの場면을意図的に授業の中に仕組むこと、学習したことを活用する資料として新聞を活用することにより、伝え合う力を育てる指導の在り方を明らかにする。

3 研究の内容

(1) 「伝え合う力」について

新学習指導要領では、「伝え合う力」とは、「人間と人間との関係の中で、互いの立場や考えを尊重しながら、言語を通して適切に表現したり正確に理解したりする力である」と示されている。つまり、授業の中に話し合う、助言し合う、発表し合うなど伝え合う場면을意図的に設定するといった指導過程を工夫することで、児童が友だちの考えを受け入れる中で自分の考えをより深めることができるだろうと考えられる。本研究における「伝え合う力」とは、自分の考えを伝えるだけでなく、相手の考えを受け止めて理解し、意見や感想を述べたりするなどの言語活動を通して培われていく能力であると考えられる。

(2) 「新聞の活用」について

新学習指導要領は、各教科で「言語活動の充実」を掲げ、「新聞の活用」が打ち出された。小学校3・4年に「疑問に思ったことを調べて、報告する文章を書いたり、学級新聞などに表し

たりすること」、小学校5・6年に「編集の仕方
や記事の書き方に注意して新聞を読むこと」と
して新聞が明確に位置づけられている。

本研究では、新聞活用そのものを目的にする
のではなく、子どもたちに社会に目を向けさせ、
学習したことを社会一般で活用されていること
を確かめる手段として新聞を扱う。

4 授業の実践

(1) 指導過程の工夫

①「伝え合い」の場の設定

「伝える」ためには、自分の考えを持つこと
が前提となる。自分の考えを小グループの友だ
ちに伝えようとする中で、漠然とした思いが
徐々に明確になるだろう。さらに全体で交流す
るという活動を経て、それぞれの学びの深まり
へとつながると考える。本研究ではこの3ステ
ップでの活動を「伝え合いの場」とする。小グ
ループは偶数で二つにわかれぬ最少のグルー
プ単位である3人組を基本とする。3人組での
話し合いは自己表現が苦手な児童に抵抗感が少
なく、共通点や相違点を見つけやすいため話し
合いが活性化されるだろうと考える。

実践授業では、説明的文章の内容を理解し、
段落相互の役割を考える場面で「伝え合いの場」
を意図的に設ける。

②新聞の活用

単元のねらいを達成するための教材として新
聞を活用する。ワークシートでの新聞活用の場
面では、新聞記事を教師がリライトして児童に
提示し、難しい漢字や表現をなくして児童が記
事の内容に迫れるよう配慮した。学習した知識
をもとに、実際の新聞での表現がどのように行
われているのかについて確認するとともに、新
聞に掲載されているアップとルーズの写真の説
明になっている文が記事本文中のどれなのか、
なぜ筆者がその写真を用いたのかについて想像
させる。

(2) 実践授業の概要

①単元名「説明のしかたについて考えよう」

教材名「アップとルーズで伝える」

(光村図書出版小学校4年国語下)

②単元の目標

(1) それぞれの段落が全体の中でどのような
役割を果たしているかを考えながら読むことが
できる。(伝え合いの場の設定・第5時)

(2) 写真と対応した部分に注意して読み取り、
「アップ」と「ルーズ」それぞれの特徴をまと
めることができる。(新聞の活用・第6時)

③指導計画(6時間扱い)

次	時	学習活動内容	研究とのかかわり
一	1	○アップとル ーズの言葉の意 味と違いを知る。	・大震災の後の新聞写 真から違いをおさえ る(新聞活用)。
二	2	○1～3段落の 関係を考える	・個→小グループ→全 体で意見を交流する。 (伝え合いの場)
	3	○4～6段落の 関係を捉える	
	4	○7・8段落の 役割を考える	
	5	○全文を通して 段落の役割につ いて考える	・実際の新聞で確認す る(新聞活用)。 ・個→グループ→全体 での意見交流を可視 化(伝え合いの場)
三	6	○新聞での使わ れ方を見つけ、 報告し合う。	・実際の新聞写真と記 事から、記者の思いを 想像する(新聞活用)。

(3) 実践授業の実際と考察

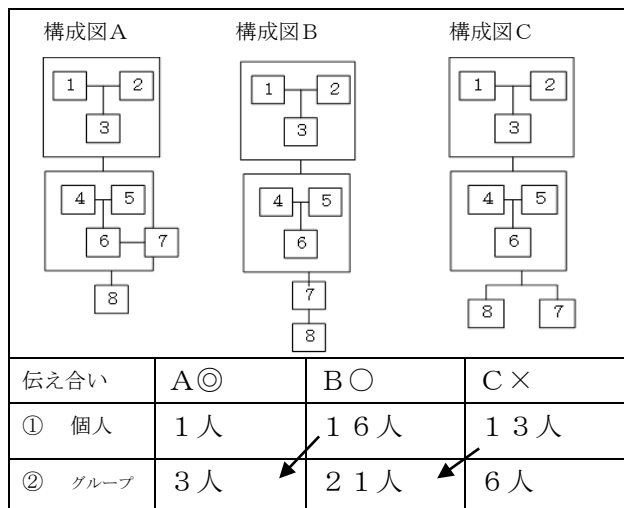
第5時の授業実践において、ねらいの一つ目
「伝え合いの場」の設定の工夫(指導の工夫①)
について検証。第6時において、「新聞活用」(指
導の工夫②)が有効であったかを検証する。

①伝え合いの場の設定について

【伝え合いの場を通しての児童の姿】

新聞という例を出して説明している7段落を
中心に全段落の役割について考え、段落構成図
を仕上げる活動の場面において、「個人で考え
る→小グループで交流→全体で検討」という
三段階の学習ステップを流れとするという伝
え合いの場を設定した。

児童から出された構成図は以下の通りである。構成図Bが解答例であるが、⑥⑦の類比の関係を読み取り、構成図Aのように表すことができればより深い読み取りができたといえる。



個人で自分の考えをもち、ワークシートを書く場面では、これまでの学習を振り返り、本文を読み返しながらか総合的に考え、一人一人が自分の考えをワークシートに書くことができた。

それぞれ自分の考えをもとに小グループでの話し合いに入った。構成図を表すところでは、グループごとに段落のカードを渡し、操作しながら考えさせてみた。実際物として手元で操作させたことで、よく考えて話し合いができていた。カードを紙に貼り付けて、根拠を書いていく過程によって、文章全体の構成を可視化することができた。グループ学習の中で友だちの意見や根拠を聞き、本文に戻って読み直すなどしてじっくり考えている姿も見られた。グループでの話し合いの結果、上の表に示したように、自分の考えが変容した児童が見られた。

全体での意見交流の場面では、それぞれのグループの考えを黒板にはりだしたので、自分たちの考えと比べながら他者の考えに触れることができた。構成図C→B→Aの順にとりあげ、それぞれの根拠を言わせた。Aを出したグループは1グループであったが、根拠をはっきりさせながら自分たちの考えを伝えた(資料1)。

資料1 Aの構成図を作成した児童らの発表

「1から6は全体的にテレビ、7には新聞のことが書かれています。7はテレビで考えたアップとルーズのことを新聞を例に出して書いているから、6と7を並べました」

それぞれの発表後の意見交流では、構成図Aの考えを聞き、なるほどなあ后感心したり、考えが変わったりしたという趣旨の発言が多く出た。児童が書いた学習後の感想にも、グループ相互の意見交流を通して、考えがより深まった様子が見られた(資料2)。

資料2 Aに影響を受けた児童の感想

『「アップとルーズで伝える」の1から8段落のつながりがよくわかった。(構成図Aの考えを出した) Aくんグループの意見がいいと思った。自分の意見が変わった」

【考察】

段落のつながり全体を考えるという課題は、児童にとって初めての経験であり、難しいと思われた。しかし、「なやんだ所がおもしろかった」「構成図ですごくなやんだけど楽しかった」と児童らが感想に書いたように、悩みながらも、友だちと伝え合いの場を経て自分なりの考えを深めていく様子が見られた。「伝え合いの場」を設定したことにより、本時の目標である「全文を読み返して段落の役割をとらえ、文章全体の構成をつかむことができる」に迫ることができたのではないかと考える。よって、「伝え合いの場」の設定は、子どもたちの学びが深まっていくために有効な指導の工夫の一つであることが確かめられた。

②「新聞の活用」について

【新聞を活用した児童の姿】

第6時はこれまでの学習の総まとめとして、「身近な新聞のアップとルーズの使われ方から、そのよさを考えよう」を課題に新聞活用をメインとした授業を行った。実際の新聞の写真と記事を掲載したワークシートを使用し、身近な新聞にこれまで学習してきたアップとルーズが使

われているよさを考えさせることにした。

ワークシートは、班ごとに別々の物を用意し、記事の内容を知らない他の班の友だちに、アップとルーズの観点から、実際の新聞写真について説明するという課題を仕組んだ。それぞれのワークシートの写真は、子どもたちにより身近であるもの、新聞を通して社会に触れることができるものという視点で選択した。

個人でワークシートに向き合い考える段階では、子どもたちはそれぞれアップとルーズについて学習してきたことを生かし、与えられた写真がアップかルーズかを考えたり、記者が写真を使って伝えたいことは何かを考えたりしている姿が見られた。

本時では、自分の考えを持った上で5、6人の班で話し合い、その後、全体に伝えるというステップをとった。班グループでの話し合いには慣れていないためか、自分の考えを班員に伝えるにとどまっていたが、全体で説明する場面ではどの班も写真を手に持って、写真と対応させながら説明することができた。話す側は他の班の友だちが知らない内容を伝えるという課題により目的意識がはっきりしていたので、堂々と語ることができた。また、聞く側も興味を持つてのぞむことができ、「伝え合い」という相互交流のコミュニケーションが生まれた。児童らの授業後の感想にも新聞を媒介とした「伝え合い」を通して得た充実感が表れている(資料3)。

資料3 新聞の発表を終えた児童の感想

「自分たちもみんなにアップとルーズを伝えて楽しかった」

「他の班の人は、ちゃんと写真に合わせて上手な説明をされていてよかったです。私の班もちゃんと説明できてよかったです」

【考察】

今回、新聞を活用したことで、「アップとルーズで伝える」で読み取った内容が実際の言語行為である新聞でどのように利用されているかを確認することができた。一人一人の子どもが、写真と対応した記事や写真説明に注意し、ワー

クシートの写真は「アップ」なのか「ルーズ」なのかを読み取ることができた。また、自分なりに写真の説明をすることができ、「アップ」と「ルーズ」それぞれの特徴をまとめ、記者の思いを伝えることができていた。よって、この単元の学習において、指導の目標を達成する手段として、新聞の活用が有効な指導の工夫の一つであることが確認された。

5 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

- 授業の中に、「伝え合いの場」を設定することにより、一人一人が授業に参加意識を持つことができ、交流活動を経て、一人一人の読みを深めることができた。
- 新聞を活用することにより、教材文で読み取ったように、実際の新聞でも写真が記事の内容を伝えるために、効果的に用いられていることが分かり、社会の出来事にも興味を示すようになった。

(2) 今後の課題

- 伝え合いの場を授業に仕組むには、その前提となる話し合いの仕方などの系統的な指導が必要となる。基本的な話す、聞く、対話の技術の系統的かつ効果的な指導について考えていきたい。
- 児童が新聞づくりを通して、「伝え合い」学び合う活動を教育課程の中に取り込んでいきたい。
- 新聞活用は、教科や単元によって取り入れることが困難な授業もある。新聞活用が有効と思われる教科や単元を洗い出して、指導に生かしていきたい。

<参考・引用文献>

- ・小学校学習指導要領, 文部科学省, 平成20年
- ・朝日新聞 (平成23年10月3日付)
- ・山梨日日新聞 (平成23年9月22日・10月17日・10月29日・10月27日・10月31日付)
- ・読売新聞 (平成23年10月30日付)